

ブレない投資手法 曲げない投資哲学

相場に立ち向かうための「起承転結」

林知之著

まえがき

私には3人の子どもがいて、みな成人しています。

彼らからは、「お父さんはきたない」と言われます。実は、ある事件がきっかけだったのです。

3人とも小学生のころ、たっぷり貯まった私の500円玉貯金を数えてもらおうとしたのに誰も乗ってこない。そこで、「金額を当てたら全額やる！」と言うと、あっけなく食いついてきました。

「よし、それぞれの予想金額を紙に書け」。

3人とも、真剣な表情で数字を書いています。

「ファイナルアンサー？ よし、数えてくれ」。

3人とも真剣な顔つきで、テーブルの上に500円玉を並べ、10枚ずつの山をつくり始めました。途中で自分が申告した金額を超えてグッタリした子どもには、「約束なんだから最後まで数えなさい」なんて厳しいことを言いながら、私はでんと構えて見守っていたのです。

すると最後に、入れ物の底から100円玉が1枚。

いやあ、金額がピタリ当たるはずはないと思いながらも、つい保険をかけてしまったのです。

3人とも私をにらみつけ、「きたない」と言いました。オトナとして引くわけにはいかないので、とりあえず「500円玉しか入っていないとは言わなかった」と正当性を主張したのですが、「きたない」コールが激しさを増したのは言うまでもありません。

この事件を機に、私は“要注意人物”に成り下がったわけですが、

子どもたち3人には、ものごとを隅々まで観察する発想を刷り込むことができたと自負しています。

真面目な話、おカネのことに限らず、自分だけの視点、自分だけの意見をもってほしいと願いながら、彼ら3人と接してきました。

例えば、昔話の桃太郎については、次のように問いかけました。

鬼って、本当に悪いことしてお宝を集めたのだろうか？

鬼たちが悪者だったとしても、「3人は、お宝で幸せに暮らしました」ってエンディングは疑問だ……。

命がけて鬼ヶ島に行ったサル、イヌ、キジの報酬が、きびだんご1つってどうよ？

私が絶好調になる前に、彼らは飽きていましたけどね。

世の中に出れば、ウソがいくらでもあります。

私自身が中学生のころ、露天商がハチミツを売っていました。すぐ横には透明のケースがあり、ミツバチが元気に飛んでいる姿が……。肝心のハチミツは、大きいガラス瓶にたっぷり、たったの千円。子どもながらに「買いた！」と興奮し、自分の小遣いで買って持ち帰ると父親が、実に冷めた表情で次のように言いました。

「ほとんど水飴、もしかしたら水飴に色をつけただけの偽物だ」。

「だって、横でハチが飛んでた」と言った私は、大笑いされました。

露天商は私に何も言っていません。ハチが飛んでいただけです。

オトナになってからも、同じような経験があります。デジカメなんてなかった時代、繁華街を歩いていてチャライおにいさんから声をかけられ、「裸と裸がからみ合う写真」を購入、なぜか角を曲がるまで歩いたところで、手渡された封筒をそっと開けると、出てきたのは相

撲の写真でした。このエピソードはいまだに笑えるので、払った金額の何十倍もの価値を生む成功の投資だったわけですが……。

さて、多少のことはご愛敬、みな持ちつ持たれつ、重箱の隅をつつくようなことばかり言っても人生は楽しくありません。

ただ、金融に関しては、ちょっとしたウソも笑えないのです。

500円玉事件と同じことを、私が仕事でやっていたら、私の子どもたちも、笑いながら「きたない」と言うことはないでしょう。説教されるか縁を切られるか、どちらかでしょうね。

でも実際、株式市場を含めた金融の世界には、多くのウソがまん延しています。株式講演会で声をかけてくる人は、最高の友だちになるかもしれないのですが、カモを探している詐欺師かもしれません。振り込め詐欺のような、あからさまな悪事も増加しています。昔、「消防署のほうから来ました」なんてトークで消火器を売りつける商売がありました、いま思えばカワイイものです。

真剣にトレードをしているみなさん、株式市場での成功を目指しているみなさん、視野を広く保って知識を身につけてください。そのうえで、迷いなく自分の決断を下す実行力を高めてください。「どのタイミングで買うか」の前に、「おカネとは何か」を考えてください。難しい決断に遭遇したとき、潜在的な能力として助けとなります。

多くの投資家がついおろそかにする部分、土台となる智慧を蓄えてほしい……この本は、そんな思いで上梓した一冊です。

2017年4月

林 知之

起承転結

そろそろ、おカネのはなしをしようか…

～投資する前に知っておきたいこと～

01 おカネについて真剣に考察してみる	12
02 幸せはおカネでは買えない?	14
03 節約してもおカネは殖えない	16
04 おカネはおカネに稼がせる.....	18
05 意外とカンタン 金融のカラクリ	20
06 資産形成のための株式投資.....	22
07 個人投資家こそプロの視点をもつべき	24
08 経験しないとわからないこと	26
09 価格推移と人間心理	28
10 儲かる数式探しをするな	30
11 勝率の落とし穴.....	32
12 トレードの利益.....	34
13 メディアが発信する情報に注意せよ!	36
コラム 自分の年金は自分で運用する	38

起承転結

だから相場で損をする

～トレードあるある～

01	自分が買いたいと思うと、いつも天井	40
02	自分の都合で考えるのが人間	42
03	当てたい……	44
04	トレードの基準はシンプルに	46
05	人が陥りやすい誤り	48
06	アタマとシッポはくれてやれ	52
07	ツナギの効用	54
08	小幅利食いが手堅いわけじゃない	57
09	欠点のない手法は存在しない	60
10	良いナンピン、悪いナンピン	62
11	投資はガマンなのか	66
12	計算と現実のギャップ	68
コラム	日経平均を見るな	72

起承転結

相場は技術だ！

～賢明なる投機家になるために～

01 「安く買う」でホントに儲かるの？	74
02 買う理由を明確にしよう	76
03 パターン化した戦略でトレードする	78
04 移動平均線のワナ	81
05 予測を当てるのではなく「対応する」ことを考える	84
06 試し玉	86
07 取れるときと取れないとき	88
08 転換点を見つけるポイント	91
09 理屈だけでは片づかない。カタチも整えよう	94
10 “ダマシ”とどう付き合うか	96
11 正しいトレードでは損が先行する	98
12 カタチによるリスク管理	100
13 資金管理が大切	102
14 理論に裏付けられた実行力	104
コラム 必要な妄想もある	106

起承転結

確信ある自分流

～林投資研究所からのメッセージ～

01	個人投資家は自由だ	108
02	適切な“制約”を設ける	110
03	自分に“ダメ出し”をしない	112
04	トレード手法とは	114
05	トレードの守破離～その1	116
06	トレードの守破離～その2	119
07	手法や狙い所による「取れる取れない」	122
08	ルールの土台を大切に作る	124
09	苦しみを楽しみに変える工夫	126
10	システムと裁量の融合	129
11	相場難民にならないために	132
12	確信ある自分流	134
コラム	儲かりませ	136

本書は、2017年3月末の情報に基づいています。
また、投資の判断は自分自身の責任において行ってください。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]



そろそろ、
おカネのはなしを
しようか…

～投資する前に知っておきたいこと～

起承転結

01

おカネについて真剣に考察してみる

おカネって何でしょう……。

オトナなら誰もが毎日かわるものだし、大切にしています。だから、「真剣に考察してみよう」と言われても、「考えていますよ」と言い返すだけかもしれません。

でも、意外と狭い範囲のことしか考えていない人が多いのも事実です。おカネに関する突発的な出来事、あるいは、ちょっと大きな金額になると、いつものように冷静に考えて確信ある答えを出せないものなのです。

宝くじの高額当選者には、ある特別な冊子が渡されます。タイトルは『その日から読む本』。冊子の作成には、金融の専門家から法律家、心理学者まで加わっているそうで、突然に舞い込んだ多額のおカネで人生が狂ってしまわないようにとの配慮があるようです。

伝聞によると、実に説教くさい内容とのことですが、当選金を渡す前に熟読してもらっても、おカネに溺れる人は少なくないそうです。

自分自身のことを考えてみてください。日常で使う金額は通常、数百円から数千円です。数万円という和多いほうでしょう。そんな日常で突然、50万円の現金を拾ったとしたら……。

千円札1枚ならば、なんとなく想像していた通りの対応をするでしょうが、道端に50万円落ちていたら、「テレビのドッキリ？」とキョロキョロしたり、何かのワナかもしれないと深読みしたり、もしかすると、ちょっとだけ邪悪な気持ちが芽生えちゃうかもしれません。

オトナですから、社会常識をわきまえています。今までの経験から、たいていの事柄について、どう対応すべきかを知っています。でも、知識とは裏腹に“からだが動かない”ケース、“誤った行動に走ってしまう”ケースがいくらかもあるのです。

チカンに遭遇したときに声を上げさえすれば、周囲の乗客のうち、1人や2人は確実に行動してくれるとわかっているのですが、実際には声が出せないようです。

チカンを想定し、「自分が大きな声を出して周囲の人が助けてくれる」というリアルな映像を、スポーツやダンスの練習のように何度も繰り返さないと、なかなか実行できないのでしょうか。「チカンよ～」と言える人は、勇気だけでなく、そんな非日常の場面をふだんから想像して準備する気持ちが強い人なのです。

ちなみに私も、チカンに間違われたときのことは想定していません。混雑した電車を避けています。

本題の、おカネの話に戻ります。

日本は、金融に関する教育が、驚くほど遅れていると思います。

背景には、おカネをタブー視する風潮や、知識に偏った学校教育などがあるのですが、性善説に基づく日本人同士の信頼関係も大きいかもしれません。親や先生が、おカネのことを深く考えさせる機会をつくっていないと感じます。

信頼関係を逆手に取った、ふざけた詐欺行為に引っかからないために、低金利だから「なんとかしなくっちゃ」という強迫観念で行動して後悔しないために、ふだんから、おカネについて深く考えておきたいものです。

自分の年金は自分で運用する

ずいぶん前から、日本の年金問題がニュースで取り上げられています。

「若い世代は一定の年齢になっても年金をもらえない」とか「年金制度は破綻する」など、夢も希望もないような話が飛び交い、「それならば」と年金を不払いする人が増え、これまた問題を複雑にしています。

現在の日本の年金制度は、自分で積み立てたおカネを、老後になって自分で受け取れるという方式ではありません。

若い世代が高齢者を支える仕組みで、国の成長とともに人口も増えていく、つまり常に若い世代が大勢いることを前提にルールをつくったので、少子高齢化で構造的にダメになってしまったわけです。

高齢になっても年金を受給できない……そんな極端なことはないと思いますが、いま年金を受け取

っている世代に比べて若い世代は、受け取る金額が確実に少なくなりそうなのです。

だけど、突然に少子高齢化が進んだわけではありません。何十年も前からわかっていたはずですよ。

国家の中枢には、頭のいい人がたくさんいるはずなのに、とても不思議ですね。

ただ、日本人である以上、年金は払ってください。

さて、年金問題を解決しようと思ったらタイヘンすぎるので、制度が改善され、国民と国家の信頼関係が築かれることを願いつつ、自分の手で自分の老後資金を蓄えておくことを考えるべきだと思います。

ただし、ツメに火をともし節約したって、前述の通り、低い限界にぶつかります。

貯めたおカネを減らさないようにする、そのうえで積極的に殖やすことを計画するのが正解でしょう。



だから相場で損をする

～トレードあるある～

起承転結

01

自分が買いたいと思うと、いつも天井

ある個人投資家が「この銘柄がいい」と買うと必ず天井をつけて下げ始める——これは実話です。昔は「出ると負け」なんて呼ばれたタイプですが、実は、とても素直な人、純粋な人間なのです。

株は、買われる材料があって上がる、売られる材料があって下がるのが基本ですが、マーケット参加者の売り買いで値段が決まる構造なので、上にも下にも極端に振れますし、材料を次々に先取りする（織り込む）度合いまでは誰にも計れないので、観察者が確信する予測と驚くほどのズレが生じるケースが多々あるのです。

新たに買う人がどんどん増加すると、上げ相場がスタートします。初期で新規参加者が少ない段階では安値から放れるだけの上昇ですが、動きに気づいて次のグループが参加すれば、株価はさらに上伸びます。株価が天井を打つタイミングでは、最も腰の重い投資家まで参入してきます。さらなる参加者の増加は見込めない、最後の段階です。

ピークでは、好材料がそろっています。実際に会社の内容が変わっていない場合でも、飛び交う情報が好材料一色になり、あたかも別の会社に生まれ変わったような雰囲気でも、誰も疑いをもちません。実際に、株価が大きく上がっているからです。

ところが、それは単なる過去の出来事で、これからも上げ続けるかどうかは神のみぞ知るところ。こんなときは、「いい銘柄だ」「強い」と好感度が高まり、「ミスター出ると負け」も、ベテランも、明るい気分でその銘柄を見ています。ですが、それが天井なのです。

ある日、ミスターが言いました。「オレが買いたいと思うと、いつも天井だ。じゃあ、この銘柄はもう上がらない。カラ売りしよう」。

結果は……暴騰しました。ミスターの“ファイナルアンサー”は「いま天井」だったので、それに反して株価は上伸したのです。

ちょっと笑える実話を紹介しましたが、ミスターをバカにはいけません。素直で純粹と説明したように、私たちマーケット参加者が持ち合わせる純粹さを、そのまま行動に移している人なのです。

一方、ベテランのA氏。自らも売買するかたわら、多くの個人投資家と交流がありますが、自分が仕込んだ銘柄を周囲の人に勧めるのは、ある程度まで上がったあとです。なぜか……。確信があったとはいえ、買った時点では地味な値動きしかなく、話しても興味をもつ人がいません。でも、市場で少し話題になるくらいまで上がれば、A氏の見通しが正しいと証明される状況に変わり、周囲の人は耳を傾けます。ちょっと見わたせば、好材料を紹介した強気の情報に出くわします。

A氏は決して、みんなに買わせて自分が売り抜けようとしているわけではありません。仕込んだ銘柄が安値圏にいるうちは、周囲の人の反応が悪いとか自信がないとか、「これ、すごくいいと思うよ！」なんて言葉はすんなり出ないのです。結果として、安値にいるときの価値ある情報は、株価が上昇して、「本当は売りの準備」という状況に変わってから「良い情報だ」と周囲に認められるのです。

落ち着いて売買して利益を上げている人でも、多かれ少なかれ同じような心理です。ただ、過去の失敗の経験から、正しい対応策を知っている、ギリギリで踏みとどまるための客観的な判断方法と基準をもっているだけで、超人でもなければ“売買マシン”でもないのです。

日経平均を見るな

投資関連の情報は、ひたすら日経平均を考察します。しかも、チャートのタテ方向のみ、日経平均の「水準」ばかりが論じられています。

さらには、絶対に結論が出ないにもかかわらず、「どうしたら先行きを当てられるか」という観点が満載……。

世界情勢が、日本のマーケットにも影響を与えるのは事実。でも、ひとつひとつを考えていたら、体がもちません。

それに、投資家の不安を“チクチクと突く”ようなメディアの姿勢に振り回されていたら、独立した状態で決断する“プレイヤー”としてバランスが悪いでしょう。

学校のテストで、英語と数学どちらも50点ならば「平均」も50点です。次のテストで英語が100点になった、しかし数学は0点だった。50点が100点に上がったの

も事件ならば、50点が0点に落ちたのも事件ですが、「平均」は前回と同じ50点です。

「平均点は前回と同じ。特に変化なし」という結論を出せるでしょうか？ 否！ “個々の点数の変化”こそが問題なのです。

日経平均は東証一部に上場する約2,000銘柄のうち、たった225銘柄を対象とした単なる平均です。

上昇する銘柄が多ければ日経平均も上昇するという理解は間違っていないませんが、テストの平均点の例と同じく、個々の銘柄のさまざまな値動きが見えることはありません。

まずは、「日経平均を見る」という、メディアに刷り込まれた視点から脱却すべきです。

売買の対象とする個別銘柄の動きをストレートに観察し、最も大切な「自分自身の出処進退」を考える適正な姿勢に、自然と移行するでしょう。



相場は技術だ！

～賢明なる投機家になるために～

起承転結

01

「安く買う」でホントに儲かるの？

安く買って高く売る——。「相場の極意」などといわれる表現ですが、この言葉をそのまま実行に移そうとしても、適正なトレードスタイルは確立できないと私は考えています。

買い値よりも売り値のほうが高ければ儲かる、逆なら損をする……当たり前のことなのですが、「安く買う」というところに落とし穴があるのです。「安く買う」を大切にすぎた結果、どんなことになるか、考えられるミスのパターンを並べてみましょう。

- ・安くなったので買ったら、さらに下がった
- ・安値を拾ったが、上がらない
- ・手堅く出遅れを買ったつもりが、“出ずじまい”が続いている
- ・安く買って上がってきたが、周囲の銘柄に比べて上昇が鈍い

つい、目先の結果論だけで「ミスだ」と決めつけてしまうこともあります。でも、考え方のズレが原因で、恒常的にこれらのミスにつながっているケースも少なくないでしょう。つまり、イメージを変えるだけでパフォーマンスが向上する可能性があるということです。

動いた銘柄に目をつけて乱暴に飛びついていたらケガのもとですし、むやみな順張りが有利とはいえません。でも単純なイメージで比較するならば、「安く買って……」よりも「高く買って、さらに高値で売る」という言葉で考えたほうが、強い銘柄の上昇に乗りやすいと思うのです。

システムトレーダーの照沼佳夫氏は、次のように語っています。

「『高く買って、さらに高値で売る』では、まだ“弱い”と思います。高く買って、さらに高値で買い乗せるんですよ」。

いわく、「一定幅で買い下がると常に評価損。逆に、一定幅で買い上がると、上がっていく相場でポジションを増やししながら、評価益の状態を維持できる」。

平均値を有利にする（平均値を不利にしない）ことは大切ですが、強い銘柄を買い、弱い銘柄は売り建てする、言い換えれば、相場の“流れにつく”という根本的な問題が優先されるのです。

とはいえ、安いところで買っておかないと、上がったあとで「あそこが買い場だった」と後悔することになりかねません。あるいは、買いそびれた経験から動いた銘柄に飛び乗ったとたん、スルスルッと下がって動かなくなる、なんてこともあります。

これを解決するのが、分割売買です。分割によるポジションづくりを計画的に行えば、例えば次に挙げるような取り組み方で、自分を見失わずに値動きの中をラクに泳いでいくことができます。

- ・安値圏で一部を仕込み、動き始めを確認して増し玉する
- ・動き始めたらすぐに乗るが、見込み違いの場合はサイズが小さいうちに損切り、見込み通りだと判断したら押し目で増し玉
- ・いずれにしても、上昇の強さを確認してから乗せて、効率良く上げを取る

どの方式を選ぶかは好みの問題ですが、分割売買を前提にすると、自分をコントロールしながらポジション操作を行うことが可能になるでしょう。また、大差のない2つくらいの方式ならば、「状況によって使い分ける」ことも難しくはないはずです。

必要な妄想もある

「できない」と思ったら100%実現しない、「できる」と信じれば大いなる可能性が生まれる。

オリンピックやワールドカップで活躍する選手たちを見ながら、つくづく感じることです。

トレードにおいても、同じことがいえるのではないのでしょうか。

次のトレードでの成功を目指しながらも、大きなミスを避けようとするあまり、負けた記憶を繰り返しなぞってしまうのが常識的な社会人の傾向ですが、「また失敗するかも……」というイメージが強まることで現実の成功率も低下しているはずです。

とはいえ、価格変動を自らの努力で変えることはできません。

ちまたの投資情報では、個別株について「目標株価」という言葉で上昇後の予測が示されているのを目にします。

しかし、個人の努力が及ばない

部分で「目標」というのは明らかに誤りです。

情報発信者の「希望（予測）」が「目標」という言葉で表現され、それが情報受信者の「目標」になる……結果として、単なる希望的観測を抱きながら“目標株価”に達するまで思考停止で保有し続けるだけになってしまうのです。

まとめると、トレーダーとして「できる」という強い気持ちは大切な半面、現実を無視した思考に陥りやすいので注意が必要、ということです。

ものごとに取り組むとき、創造性を刺激する「妄想」は必要です。

例えば、ロボットの二足歩行について、一部の科学者が「絶対にムリだ」と言っていたのですが、「できる」と信じた人たちの手によって実現し、歩行するどころか、自転車をこいだり踊ったりしていませんか。



確信ある自分流

～ 林投資研究所からのメッセージ～

起承転結 01

個人投資家は自由だ

個人投資家が置かれている立場で最も特徴的なことは、「自由」だということです。相場が上昇すると「持たないリスク」なんて言葉を使う経済記者がいるのですが、とんでもないことです。個人投資家に、持たないリスクなどありません。

あるのは、「やりすぎてしまうリスク」だけです。会社勤めの人にしろ自営業者にしろ、本業で稼ぎ、その資金を温存することが第一なので、個人投資家に“機会損失”という発想は無用です。

攻める前に守る——トレード資金、売買数量、売買機会のすべてを抑えるくらいでちょうどいいのです。

とにかく、攻めるも引くも自由、銘柄どころか市場を選ぶのも完全に自由なのですが、自由すぎて迷ってしまうのです。

その迷いを解決しないまま「とりあえずポジションを取って……」となるから、次の一手を決めかねて迷い、つらい決断の連続を強いられる悪循環のパターンに陥ることが多いのです。

すべて自分で決めなければならないのですが、それこそ自由なので、思いついたことを自分のルールとして、自分に制約を課すようにするといいでしょう。

例えば私は、裁量のトレードにおいて、「月曜日に新規売買をしない」というルールを守っています。ポジションを減らす手仕舞いは月曜日でもOK、しかしポジションを増やす場合、絶対に月曜日だけは避ける、という決め事です。

「月曜日には、土日で考えに考え抜いた多くの人がサイアクの手を打つ」というのが、このルールの根底にある考え方です。

「自分はちがうと思うのは、おごりだ。月曜の新規売買を自分に許すと、自然とダメな手を打つ人たちに近づいていく」という論理です。月曜日から金曜日まで、週に5日の立会があります。

1日1回、例えば朝の寄付で売買するだけというルールを考えます。手仕舞いのチャンスは毎週5回あるのに、仕掛けのチャンスは1回少ない4回、率にして5分の4、つまり20%もチャンスが減ってしまうのですが、この縛りがあることで、土日に新しいことを思いついて悩むことから完全に解放されます。

相場の先行きがわからない悩みは、ほかの参加者たちと全く同じですが、行動を制限することで迷いは確実に減少するのです。不自由なようでいて、実に自由な立ち位置を維持できている実感があります。

プロとアマの大きな差は、この「制約の有無」にあるといってもいいでしょう。

組織に属するプロは、取引する市場からトレードサイズまで、かなり厳しくルールを決められています。おのずと、進むべき方向が定まり、パフォーマンス（結果）も安定するのです。

一匹狼の独立トレーダーも、「これで食っていかなければならない」という気持ちがあるので、ムチャはしません。

自然と、活動範囲を限定する自分ルールをつくるようになります。

しかし、最後の決断は常に感性や好みによって「えいやっ！」とやることになるので、方向性が明確な中で実に自由なトレードを展開しているといえるでしょう。